

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

深田久彌●山の文学全集

Ⅱ

山頂山麓

朝日新聞社

深田久彌・山の文学全集 II

山頂山麓

全十二巻・第三回配本

一八〇〇円

発行 昭和四十九年五月二十一日
著者 深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Shigeo Fukada 1974

深田久彌・山の文学全集

II

次

九

11

五

五五

六八

七二

八

八七

九三

九五

九九

FOR

111

山を見る

焼 山

冬の犬越路

樹 氷

スキーだより

あとがき

をちこちの山……………

一五三

一五〇

一四三

一三八

一三三

一三三

一二七

立 山

山上の池沼

富士のお鉢

小谷温泉 付・湯峠

ふもと

荒 船 山

山の名前

秋の本栖湖

男 体 山

一五五

一六六

一七二

一七九

一八八

一九二

一九九

二〇三

二〇七

日本の山	二五
雪山の幻覚と幻影	二八
元日の山	三四
信州峠	三八
菅平行	三五
妙高山	四〇
一日二日の山	四四
石鎚山	四九
苗場ヒュッテ	五九
七面山	六四
晩秋の金峰山	七二
登山黄金時代	七五
ニセコアンヌプリ	七六
あとがき	八三

山岳雑記帳	八五
-------	----

江沼郡の山に就いて	八七
-----------	----

故郷の山	二九〇
山の仲間	二九二
テントの一夜	二九六
夏山雜記	二九九
雪の中の正月	三〇二
雪の牧場	三〇六
スキーの遭難	三〇七
山の見える町	三〇九
車窓から見た山	三一二
上州の山	三二六
山の人	三三八
山の絵葉書と南アルプス	三三二
山の文壇人	三三三
実朝と山	三三七
アルプスへの憧れ	三三八
『村里生活記』	三三九
山の話	三四三
気持の尊さ	三四六

山岳雜記帳

三六

山と芸術家

三七

山の文学

三八

深田久彌・人と作品(二)

解題

近藤 信行…… 三九

中馬 敏隆…… 四一

山頂山麓

薩南の山旅

霧島山

一

昨年（一九三九年）十二月、満洲・北支・蒙疆二カ月間の旅を終えて下関へ上陸した僕は、直ぐその足で鹿児島へ向かった。鹿児島県の二千六百年奉祝会からの招きを受けて、肇国の御聖蹟高千穂峰に登るためである。

高千穂峰に登るのが第一の目的であったが、山好きの僕は無論それだけでは済まず、まず霧島山を極め、それから開聞岳に行き、さらに遠く屋久島の山を尋ね、最後に桜島山に登り、約二週間の間自分の好きなままに薩南の山々を歩き廻った。こんな我儘を許して下されたばか

りか、いろいろの便宜を計って下さった鹿児島県庁のかたがたに、まず厚く御礼を申しあげる。

高千穂峰は霧島火山群の一峰である。地理書によれば、この火山群の中に「大小二十二座の火山、完全なる火口十五、火口湖八、爆裂火口八、硫気孔・蒸気孔一五、温泉数十を算す」とある。これだけあれば地形もおのずから複雑になり、したがって風景もまた秀れてくるのは当然である。一九三四年（昭和九年）この霧島全体を含む約二万町歩が国立公園に指定された。そして現在山中諸般の設備が着々と進められつつある。この山岳公園を出来るだけ広く探ろうというのが、僕の最初の旅程であった。十二月七日の夕方、かねてから憧れの鹿児島市に着き、翌八日は見物と挨拶に歩き廻り、九日の朝鹿児島をたつて霧島山に向かった。たまたま聖蹟御巡拝中の川田順氏御夫妻、都新聞の末松太郎、福本明両君と同行することになり、県庁学務課の東郷義国氏が案内にたつて下さった。

宮崎行の汽車は鹿児島を離れると、吉野台の打ち続く断崖の下を、海ぎしに沿って走って行く。良い天気で、波静かな錦江湾の彼方に悠然と桜島が浮かんでいる。行

手遙かに霧島連山の見えることもあった。汽車の進行につれて桜島の峰の形が次第に変わって行き、煙を吐く右端の峰が左端に見えるようになった頃、隼人駅に着いた。官幣大社鹿兒島神宮に参拝するために、ここで下車して、自動車で行く。

鹿兒島神宮は彦火火出見尊を祀り奉る。境内の入口に大きな樟が見事な枝を張っている。その艶々した実が石段の上にこぼれているのを、川田さんの奥さんは記念のためと言って拾われた。社殿は全部朱塗りで、拝殿に上ると自分の影が床に映るほどつややかに磨かれてあった。参拝を済ましてから、社務所へ招かれてお茶の接待に預かり、赤女鯛という素朴な、謂われのあるおもちやを頂戴した。

境内を出て、直ぐ畠みちの先にある石体神社にお参りした。途中の道ばたに、今ごろ堇が咲いていると僕等がおどろくと、案内の禰宜さんが、いやこのへんでは十一月まで螢が居ますよと話された。石体神社は小さな祠で、指導標にはオシヤツテサマと仮名が振ってあった。土地の人はそう呼んで安産の神様にしているそうである。この祠のところから二里ばかり山みちを上ったところに、

彦火火出見尊を葬めまつる高屋山上陵がある。したがってここが尊の皇居高千穂宮の趾だと考証されている。そして古事記に神武天皇が御兄五瀬命と御一緒に「高千穂宮に坐して議りて云りたまひけらく、何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞き看さむ。猶東に行かむ。とのりたまひて、即ち日向より発たして筑紫に幸行でましき」とあるから、この地が御東征の御軍議をあそばされた所だとされている。

僕等はまた自動車に乗って、近くの田圃の中にある隼人塚を見（ほぼ方形の封土上に、四天王の石像と、石の多重塔がおかれてある。珍しい一種の供養塔だそうだが、だいぶ破損している）、それから去る年の特別大演習に御野立所となった獅子之尾という丘へ上った。丘の上から国分の平野が一望に見渡された。このあたり一たいはいわゆるいにしえの襲の国で、山のたたずまい川の流れ一つにも、何か謂われがありそうな所である。北に山を負い、南は海に展げたこの平野は、風光明媚な上に、山の幸・海の幸に恵まれて、まことに神代の御皇居地であったという説に肯くことが出来た。

それからまた自動車に乗って霧島神宮の方に赴く途中、

日当山温泉で降りて昼飯にした。十二月半ばだというのに全くあたたかい。数日前まで北支・蒙疆の寒風に身を曝しながら慌ただしい一人旅をしていたことが、今こうしてのどかに飯を食べていると、何か夢のような気がする。

日当山温泉から霧島神宮まで自動車で相当あった。始めは丘陵の間の山みちを行き、やがて霧島川のほとりに出る。その途中の、峠のような上から、霧島連峰がはつきりと見えた。左の端に韓国岳、右の端に高千穂峰、この二つが大きく、その間に獅子戸岳、新燃、中岳、が指差される。やがてあの峰々に立つことを思って、心が躍った。

霧島神宮に着く。官幣大社、瓊々杵尊を祀り奉る。神橋を渡って広い石段を上ると、社務所のある広場がある。ここはすでに四百メートルを越える高さだから、その眺めはなかなか広大である。神域は老杉亭々として、おのずから厳しい気持になる神々しいお宮であった。

参拝を済まして、今夜の泊まりである林田温泉に向かった。道は次第に上りだが、坦々たる自動車道路がついている。左手にゆったりした枯草原を眺めたり、紅葉し

た樺林を抜けたりすると、ようやく山へ来たという感じがしてくる。

急なカーブの坂を上って林田温泉に着いたのは、もう夕方に近かった。見晴らしのいい部屋に通される。縁に出ると、豊かな眺めが眼路遠くまで展がっていて、桜島も見え、その右手に微かに三角形の開聞岳が小さく浮かんでいた。ここから開聞岳が見えたりするのは、よほど稀なことだそうである。

夕飯は川田さんの部屋へ集まって皆で賑やかに食べた。偶然鹿児島で一緒になって、今日一日の行を共にしたが、明日からそれぞれの行程に別れることになっている。都新聞の両君は、新年の新聞を飾る材料を得るための旅行だから、明朝未明に霧島神宮まで下って、勅題「社頭の暁」にふさわしい神域の日の出の写真を撮るのだという。川田順氏御夫婦は、氏のお言葉では「爺婆の旅行」だが、功成り名遂げたあとの羨ましい聖蹟巡礼であって、明日はやはり神宮まで下られ、そこから高千穂峰にお登りになる予定だそう。僕は霧島登山の第一日目として、大浪池から韓国岳に登り、それから海老野に下って六観音池などを見にくるつもりである。あつい温泉に浸ってか

らぐっすりと眠った。

二

翌朝、天気は良さそうである。都新聞の両君は僕の寝ている間に発って行ってしまった。朝食をすまして八時半に僕も出発する。川田さん御夫婦が玄関までお見送り下さる。奥さんは静かな人なつこいかなたであったが、この旅行から帰られて二週間目に、不意におなくなりになった。新聞でその報せを見た時、僕はこの玄関での奥さんの元気のいい笑顔を思い出して、本当かと疑いたくくらいであった。

温泉の裏手から直ぐ山みちに入る。道は始めから相当急で、右手に涸沢を見ながら、青々した森の中を行く。たいていの山旅なら、このあたりブナとナラの林の中と書くところだが、ここではサカキやカシやシキミの類なのも南国の山らしい。したがってあまり見事な紅葉は見られないが、その代わり、これらの常緑樹の葉が冴々（さえず）と洗ったようなあざやかな色をしていて、まるで新緑の山を行くように美しい。

一しきり急坂を登ると、そこは五合目で、沢を渡った。

このへんから松や梅の類が多くなってくる。しばらく緩やかな勾配が続いて、やがて、七合目、一一三〇メートルの地点に達する。登路と十字に交叉した道があって、右すれば新湯、左すれば海老野に出る。こういう道は「霧島山」五万分の一図幅には出ていない。いったい霧島は国立公園になって以来ドンドン新しい道が拓かれるとみえて、地図に出ていない山道がいたるところに通じていた。だから登山する人はあらかじめ下で道の様子を聞いて行くと、大いに得をすることがある。

七合目からはまた急な坂になって、グングンと登る。

もう木立もなくなつて、つつじ等の小灌木が群がっている。九時半、大浪池の火口壁の上に着いた。宿を出てから一時間ほどしかかからなかったのは荷の軽い一人歩きだったからだろう。霧島を訪れる人はたいてい林田温泉へ来る。林田温泉へ来た人はたいていこの大浪池までは登るそうである。したがって遊覧期には大勢の人で賑わうところを、時節外れの今は誰一人登ってくる者もない。

この大浪池は霧島じゅうで自慢だけあって、山上の湖水としては確かに推賞に価する風景である。見下ろす火口湖は深く、周りの切岸（きりぎし）もいかめしく雄大である。向こ